郡山市立小原田中学校
学校だより
No.49

手をたずさえて

“KOHARADA WAY” 自分に打ちかて

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒

令和３年３月５日（金）発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長　熊 坂　　洋

「人事を尽くして天命を待つ」

３月１日の事前指導

県立高校前期選抜を受験した３年生、お疲れさまでした。受験を終えた人たちには、安堵感や不安感などそれぞれの思いがあることでしょう。

「人事を尽くして天命を待つ」という言葉があります。

「自分ができる限りの努力をしたなら、あとは良い結果が出るのを祈って待つしかない」という意味です。できる限りのことをしているならば、後はもう流れに任せる他ありません。結果を自分でコントロールするということはできません。自分ではコントロールできない結果について、あれこれ心配したり不安に思ったりしても、時間やエネルギーがなくなっていくだけでよいことはほとんどありません。気持ちを切りかえ、卒業に向けての活動に集中していこう。

2つの卒業式の内容は次のとおりです！

来週は、いよいよ３年生にとっては中学校での最終週となります。３月８日（月）の「お別れ会」と12日（金）の「卒業証書授与式」の２つの卒業式は、次のような内容で行われます。今年度は限られた時間の中での準備・練習ですが、気持ちをしっかり込めていくことが一番大切なことです。

お別れ会　３月８日（月）５校時　体育館

進行：伊藤由衣
1　開会の言葉（吉田里桜）
2　生徒会から記念品贈呈（佐々木悠人→矢吹芽依）
3　校長先生のお話
4　在校生から卒業生へ
　○ 第１学年の発表
　○ 第２学年の発表
　○ 在校生合唱「花束」（伴奏：神田ももか）
　○ 卒業生へ応援団からエール
5　卒業生から在校生と先生方へ
　○ 第３学年の発表
6　全体合唱「輝くために」（伴奏：星　璃亜）
7　校　　歌（伴奏：近藤　凪）
8　閉会の言葉（凌りくな）

第60回卒業証書授与式

３月12日（金）13:30～　体育館

※ 卒業生入場
1　開式のことば
2　国　歌
3　卒業証書授与
4　式　辞（校　長）
5　祝　辞（ＰＴＡ会長）
6　送ることば（伊藤壱太朗）
7　別れのことば（吉田颯希）
8　式　歌「旅立ちの日に」（伴奏：矢吹芽依）
9　校　歌
10　閉式のことば
※ 卒業生退場

貸出総冊数 7,446冊、1人平均貸出数 44冊　年間図書館利用統計

今年度の年間図書館利用統計が学校司書の鈴木さんから出されました。

貸出総冊数	７,４４６冊	１日平均貸出数	４４冊
１人平均貸出数	２２.６冊	延べ貸出人数	３,８６５人
利用者実数	２５２人（全校生の77%）	（１日平均23人）	

図書掲示 今年度“よく読まれた本たち”

ちなみに昨年度の貸出総冊数は１０,６２５冊で、１日平均貸出数は６５冊でした。昨年度は１人で多くの本を借りる多読者数が多かったため、貸出冊数が多くなったとのことです。今年度の年間ベストリーダーは２年辰田鈴音さん（３７１冊）でした。

今やスマホやタブレットでも読書ができる時代ですが、本を手にしながら１ページ１ページめくり読み進めていくところに“読書の本質”があると考えます。俳優の高倉健さんがこんな言葉を残しています。**「時間があったら活字（本）を読め。 活字を読まないと顔が成長しない。顔を見れば、そいつが活字を読んでいるどうか分かる」**　ある映画監督からの教えだそうです。

“読書は人生を豊かなものする”…この機会に読書の意義について、みんなに考えてほしいと思います。

防災意識を高めるための授業の実践

先日、１年家庭科の授業では、防災に対する工夫を話し合い、防災意識を高めていこうという授業が行われました。福島沖地震が発生した直後、さらには東日本大震災から１０年目をむかえようとしている中でタイムリーな授業実践でした。生徒達からは、福島県沖地震の時の具体的な状況がいろいろと出されました。また、小原田地区は川の洪水による浸水被害を受けやすい地域でもあります。それらを踏まえ、自然災害への備えについて家庭で実践できることをみんなで考え、日頃からの備えの大切さを実感することができました。

「あたりまえ」について考える

10年前の東日本大震災の時には、停電や断水、ガソリン不足などを経験し、あたりまえのことのありがたさを痛感しました。そして、今のコロナ渦においても、同じようにあたりまえがいかに大切かを再認識することができました。そこで、防災意識を高めることに加えて、今回は別の視点から、この「あたりまえ」について考えてほしいと思います。

今回は「あたりまえ」というタイトルの詩を紹介します。これは、医師である井村和清先生が、病の床で綴った手記『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』いう本に納められている詩です。かつて映画やドラマにもなりました。この井村先生は、大病院の勤務医として患者さんに大変慕われながら、多忙な毎日を送っている時、自分の右膝にがんが見つかりました。そして、転移を防ぐために右足を切断しました。義足を付けリハビリした後、診療に復帰しましたが、一番恐れていた肺への転移が見つかりました。そして、その苦しい闘病生活の中で、父として、夫として、生きた証を残したいと書かれたのがこの手記です。長女の飛鳥ちゃんはまだ１歳、そして２番目のお子さんは、まだ奥さんのお腹の中でした。

あたりまえ

あたりまえ
こんなすばらしいことを、みんなは なぜよろこばないのでしょう
あたりまえであることを
おとうさんがいる
おかあさんがいる
手が２本あって、足が２本ある
行きたいところへ自分で歩いてゆける
手をのばせば、なんでもとれる
音が聞こえて声が出る
こんなしあわせはあるでしょうか
しかし、だれもそれをよろこばない
あたりまえだ、と笑ってすます
食事がたべられる
夜になるとちゃんと眠れ、そして又(また) 朝がくる
空気をむねいっぱいにすえる
笑える、泣ける、叫ぶこともできる
走りまわれる
みんな あたりまえのこと
こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない
そのありがたさを知っているのは、それを失くした人たちだけ
なぜでしょう
あたりまえ

井村先生は、その後３１歳の若さで旅立たれました。奥さん、飛鳥ちゃんとまだ生まれていない幼な児を残して…。どんなに無念で、どんなに心残りだったことでしょう。

この井村先生の詩から、普段私たちが「あたりまえだ」と気にもかけないことも、考えてみると、「とてもありがたいことだ」と気づかされます。
「あたりまえ」のこと、それに私たちは感謝し、それぞれに自分の役割を果たして、「あたりまえ」の社会が続くよう、その社会の一員として生きていきたいものです。